

ビ  
ツ  
グ  
サ  
プ  
ラ  
イ  
ズ

仲  
間 な  
か  
ま

友  
佑 ゆう  
すけ

二四四七年、六月十四日。歴史学者の男は、演説会場で大統領の登場を待っていた。今日は、政府からビッグサプライズがあるということ、ことで、広場には、男を含め数万人の国民が集まっていた。しばらくして、大統領が登場した。まばらな拍手の中で、演説は始められた。「二〇〇〇年代に入ってから人類にとって、大きな変化を一つ挙げるなら、人間が『夜行性』になったということがあります」そんな始まりだった。歴史学者としては、その言葉から、この数百年の歴史に思いを馳せることを禁じ得なかった。二十一世紀が終わりを迎える頃、地球温暖化は、加速度的に進み、人間の体が日中の活動に耐え切れないほどに、地球環境は悪化していた。いや、正確には、かつての人類が悪化させてしまった。元の地球にはもう戻れない。そんな取り返しつかないところまで来て、かつての人類はようやく焦りだした。だ

から、あんなにも間抜けな策を講じるほかなかったのだろう。

当時の国連主導で、世界中の社会活動を昼夜逆転させるという対策が取られたのだ。五〇年のスパンをかけてそれに移行するという大プロジェクトであるにも関わらず、政治理念や宗教、人種など、あらゆる対立を捨てた、全世界・全人類の強い団結によって、その計画は見事に完遂された。

当時の新聞記事（ニュースを紙で伝えるもの）が残っている。そこには、「ここまでの地球規模での団結は、一九八五年の『オゾン層保護に関するウィーン条約』以来例を見ない」と書かれている。この史料は、かつての人類が、団結することがどれほどに珍しいことだったのかが窺い知れるものとして、歴史研究の中では有名なものだ。

例えば、この史料からは、「二〇〇年近く前の条約を引っ張り出して驚きをもって報じられるほど、そんなことになるまで団結できな

かったとは。なんと愚かな生き物たちだろう」  
そういう見方ができる。かつての人類の特徴  
として、「争い好きで、危機的状況に陥おちいるまで  
行動しない」というものもあるから、よっぽ  
ど未熟だったのだろう。

大体、その団結力をもっと早く、地球温暖  
化の阻止に活かせていたなら。と、よく皮肉  
な気分になるが、あくまでそれは、「歴史のも  
しも」でしかない、よくある空想だ。

今では、その計画から三〇〇年近くが経ち、  
人々はすっかり夜間の生活に適応しきってい  
る。その点が唯一、生物として誇れるところ  
だろうか。

夜行性に移行してすぐの頃は、人工太陽と  
いうもので、昼間に近い明るさを作り出して  
いたらしい。そこから、一五〇年のスパンを  
かけ、次第に光量を落としていき、月明かり  
程度で生活できるように「矯正きょうせい」したという。  
それに伴って、人間の目は、より光を多く取  
り込むために、「昼の時代」に比べて、二倍程

度に大きくなった。ただし、強い光に弱い。こうして歴史に触れていると、人類というのは、有能なのか無能なのか、よくわからないくなる。かつて、世界規模での食糧難で、一〇億人ほどの餓死者を出したという苦い記憶もあるが、それも何とか乗り越えている。各国の製薬会社が技術を結集し、一日に必要な栄養を全て補い、空腹感も抑えることのできるサプリメントを開発した。現在でも、食糧は満足に手に入らないので、朝に、少しの食べ物と、サプリメントを摂るだけ。それが今日のスタンダードになっている。

当然だが、最低限の食事しかできないので、肥満になるということがない。食事を楽しむという概念は消え去り、快樂は別のものに置き換えられた。小さく痩せこけた体と、細つた顎<sup>あご</sup>。おかげで頭部は、イチゴのような形になった。

ただし、例外もある。今、私たち国民を前

にして喋る彼のようになり、少しお腹が出て、頬の肉がぷくつと膨らんでいる体型は、もはや富の象徴として捉えられるに相応しい。彼を支える側近や私たち国民の体と見比べると、うんざりした気持ちになる。これは、歴史のもしもなどではなく、大昔から普遍のものかもしれない。もう一つ、人間の身体的特徴の変化としては、夜間にしか活動しないので、日中に活動しようと思っても、昼間の紫外線量に肌が耐えられなくなっただけのことがある。それでも、日中に活動しなければいけないということがあるわけだから、そういう時には、銀色の（全身タイツのようにタイトな）、ゴーグル付きの保護スーツを頭からすっぽりと被って、肌と目を紫外線と光、そして暑さから守る。しかしながら、私たちの生活スタイルと体と、「環境第一」が世界のコンセプトとなったこと以外には、数百年前から変わることのな

い人々の暮らしが、そこにはあった。

歴史学者の意識は、そこでようやく現実に戻ってきた。スピーカーのボリュームを上げたかのように、聴力も戻ってくる、彼の演説は佳境かきょうを迎えたところだった。「そして、今日、我が国発案の元に、各国が協力し、はるか大昔からフィクションとして描かれてきた、名実ともに歴史を変える技術が完成しました。すなわち、タイムリープ技術です」

今日まで極秘裏ひりに進められてきたのだろう。目の覚めるような耳を疑うビッグサプライズに、数万人がどよめいた。「何千回にも及ぶ実験を経て、ようやく有人でのタイムリープが今日行われます。今日は、皆さんにそれをご覧いただきましょう」

万雷ばんらいの拍手につられるようにして、自分の鼓動が早くなつていくのが分かる。そんな興奮を男は覚えていた。

大統領が主任開発官を呼び出し、説明が始

まった。太陽からのエネルギーを最も効率よく利用できるのは日中。だから、昼に演説を行い皆さんにお披露目ひらびすることに決めました。他にも三分程度話していたと思うが、それどころではなかった。過去を変えることはきつと倫理的に許されやしないだろう。しかし、好きな時代に行って歴史的事象をこの目で実際に見ることは許されるのではないか。妄想が現実になることに大きな期待を抱いた。再び大統領が話し始めると、銀の保護スーツを身にまとった、数万の観衆は、その歴史的瞬間を今か今かと待ち侘まちびながら、彼の言葉に耳を傾けている。「それでは、機体をお披露目しましょう」そう言って、大統領は私たちの後ろ、はるか遠くを見据えて指差した。男を含め、銀の群衆は波打つように振り返った。遠くの方から、無機質なくすんだ銀色をした円盤型のものが浮遊しながら高速でこちらに向かって来るのが見えた。その見覚えのあ



るフォーラムに、少しだけ嫌な予感がした。しかし、それよりもタイムリープという夢のよ  
うな話が現実にあることへの目撃者としての  
興奮の方が勝っていた。  
「二名の搭乗員がこれから、ちょうど五〇〇  
年前の一九四七年まで遡り、アメリカという  
国に向かいます」  
会場の上空まで来た機体は、一度停止した  
のち、ほとんど音を立てることなく、ほんの  
少し埃っぽい青空を縦横無尽に「移動」する  
と、突如姿を消した。  
「彼らの任務は、二〇世紀の世界で地球温暖  
化を食い止めることです。全ては、この現実、  
言い換えれば、かつての愚かな人類にとって  
のこの未来を壊すため。人間の健康的な生き  
方を変えざるを得なくなった所以を作り出し  
たあの時代で、地球温暖化を阻止する。それ  
が彼らの任務なのです」  
力のこもった口調に民衆は目を輝かせなが  
ら手を叩いていた。彼の名前を繰り返しコー

ルしながら、神様と対面したかのように歓呼し、文字通り「暗い」世界に訪れた久々の希望に、熱狂している。一人を除いては。一九四七年。アメリカ。空飛ぶ円盤。地球温暖化を食い止める。頭を駆け巡るこれらの言葉に、歴史学者の男は、ことごとく絶望した。

一九四七年、六月十四日。アメリカのニューメキシコ州にて、農家の男が、牧場で奇妙な残骸を発見する。後に「ロズウェル事件」と呼ばれることになる、一連の事件の始まりだった。

乗組員の彼らの未来をその男は知っている。未来は、過去であって、過去は未来である。もはや、過去と未来の区別はその瞬間に無くなっていった。それと同時に、過去の人類を蔑んだ自分を恥じた。時間に矛盾を生み出し、その上、過去を変えようなど、再び人間は、自分たちのためだけに無神経に自然の摂理を崩していく。そして私自身、その船に乗りか

けた。

そして、男は気づいた。奈落の底に突き落とされた気分が今もこうして続いているということが、過去を、すなわちは未来を変えるなど不可能だという証明になってしまっていることに。

人間は、いつの時代にも利己的だ。それでいて、どれもこれも自分たちには関係がないと高を括<sup>く</sup>る。そうやって人間は、いつまでも愚かなまままで、歴史を繰り返すのだろうか。ひと時の狂信に包まれる会場を、男は後にした。